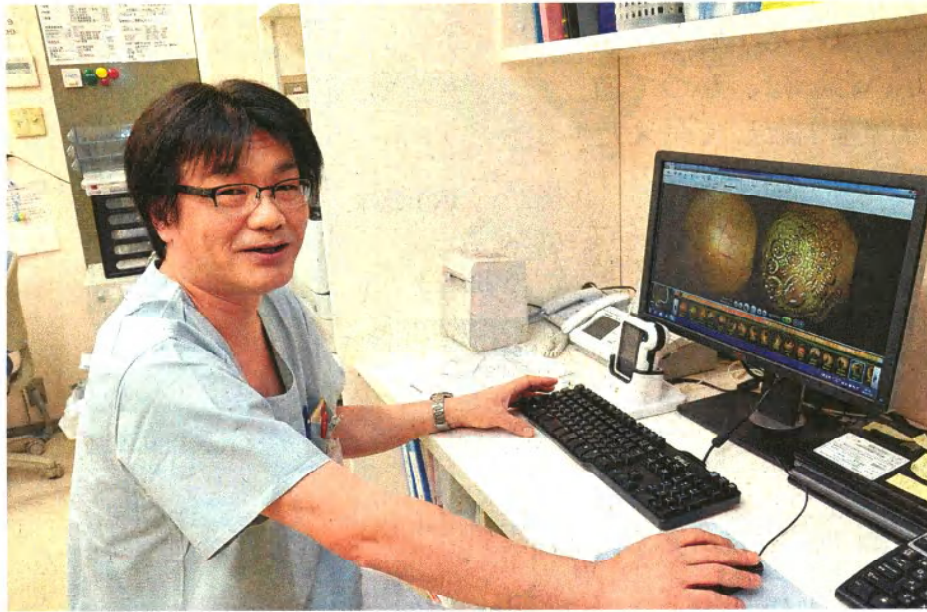


大腸がん 早期発見に期待



室蘭市知利別町の製鉄記念室蘭病院が、12月から道内で初めて大腸用カプセル内視鏡による大腸の検査を始める。導入を進めた同病院消化器・血液腫瘍内科の前田征洋副院長（日本カプセル内視鏡学会指導医）は大腸がんの早期発見が進むと期待する。検査の方法や導入の意義を聞いた。

（相沢宏）

製鉄記念室蘭病院 前田副院長に聞く

大腸用カプセル内視鏡の検査は、患者にカプセルを飲んでもら

「大腸がんの早期発見・治療につなげたい」と話す前田副院長

い、腸の内部を撮影します。検査時間は肛門から排出されるまでの約10時間。検査中、自宅や職場に帰ることも可能です。腰に着けてもらった装置に画像デ

検査の負担減／1月に保険適用

1ヶ月を記録します。厚生労働省の2011年の統計によると、大腸がんは道内男性のがんの死因の3位、女性では2位。一方で大腸がん検診の受診者は極めて少なく15・9%。異常の見つかった人の4割は精密検査を受けていません。従来の内視鏡検査はお尻から入れるので、いやがる人が多いからだと思われる。飲むだけでよいカプセル内視鏡で受診率が高まれば、大腸がんの早期発見につながるはず。

大腸がんは他の消化器系のがんと比べ、早期に発見・治療すると予後が順調なことが多く、カプセル内視鏡は現在、医療保険の対象になっています。カプセルは1秒間に最大35枚の画像を撮影するので膨大なデータが記録されます。受診者が増えた場合に対応するため、学会では、異常の可能性がある患者の写った画像を見つけてる技術を臨床検査技師らに身に付けてもらうため、新たな資格制度を創設し、来夏に運用を始めます。多くの人にカプセル内視鏡検査を受けてもらい、大腸がんの死亡率が低下することを期待しています。